



『深淵の沈黙』（東京外国語大学出版会）刊行記念

選書フェア

いまだ夜深き時代、『深淵の沈黙』を読む

野平宗弘 エッセイ

いまだ夜深き時代、『深淵の沈黙』を読む

戦争時代の反抗者

今年、世界初の翻訳として日本語訳を世に出した思想書『深淵の沈黙』。ベトナム語の原書が刊行されたのは、今から半世紀前の1967年、アメリカ軍が直接武力介入し戦況がエスカレートしていったベトナム戦争さなかの南ベトナムにおいてであった。

著者は、当時26歳だったファム・コン・ティエン（以下、ティエンと略）。彼は10代半ばから南ベトナムの文壇に登場し、欧米の20世紀の文学や哲学に加え鈴木大拙の禅思想も1950年代末より積極的に紹介していた人物だ。そうした知的な早熟さがある一方で、「大人の世界は共同墓地だ、死の世界だ。ぼくたちはもう大人たちを信じない」などと、抑えのきかない感情を爆発させ、悲惨な社会を作った大人世代に対する反抗的言動でも話題を呼び、戦争状況下にあって苦悩する若者たちの思いの代弁者として、10代、20代からは圧倒的な支持を受けていた。

救いの拒絶

1960年代後半、メディアを通じて配信されたむごたらしい戦争の様子、小国ベトナムに対する大国アメリカの大義なき蹂躪は、日本も含め世界各国で反戦運動を呼び起こし、既存の権威権力に叛逆する若者たちの闘争の起爆剤ともなった。世界の良識者たちは、可哀想なベトナムの人々に同情を寄せ、平和の到来を求めた。しかし、戦争渦中の当事国で育ったティエンは、良識者たちの差し伸べる救いの手を断固拒絶した。彼にとってみれば、良識者たちの平和思想さえも、好戦思想と同じ特定の思考様式を基礎としたものであった。平和運動や大衆運動など、何ら根本的な解決にはならないのだと彼は批判し、孤立無援を貫いた。

一切の根源的破壊へ

ティエンが求めたのは、問いそして思想することだった。彼は、ハイデッガー思想との対話・対決のもと、ベトナム戦争という形で噴出した近代世界の矛盾、破綻の根源を問い詰め、その窮極的原因を西洋形而上学と見定めた。そして、その西洋形而上学という限定的な一思考様式と、そのみならず、人間の言語が作り出した言語構築物たる洋の東西いずれの思想哲学をも粉碎して、一切のゼロ地点=<沈黙>へと回帰し、そこから、近代人が忘却してきた<性>（=存在）の新たな発現を求めた。その根源的な思想闘争の軌跡が、『深淵の沈黙』である。

『深淵の沈黙』が今の時代に投げかける問い

すでに原書刊行から50年が経ったとはいえ、『深淵の沈黙』で提起された問題は、いまだその重要性を失っていないと思われる。経済発展著しい現在のベトナムのみならず、今日の日本においても、『深淵の沈黙』が突き付けた問題の根源的な解決——ティエンは、安易な「解決」さえも問題視し、一切の希望を捨ててただ「待つ」ことを主張するが——はなされていない。たとえばハイデッガーやティエンが批判した現代社会の「存在忘却」は今なお続いているどころか、人間は科学技術の機構の中にもますます組み込まれ非人間化していつている。い

著者

ファム・コン・ティエン（Phạm Công Thiên）

1941年、ベトナム南部ミットー生まれ。詩人、思想家。小学校を退学後、10代半ばより執筆活動を始める。評論集『文芸と哲学における新たな意識』（1964年）、詩集『蛇の生まれ出づる日』（1966年）、思想書『深淵の沈黙』（1967年）、小説『太陽などありはしない』（1967年）、といった1960年代半ばより発表された一連の著作によって、ベトナム戦争当時の南ベトナムで話題となり時代の寵児となる。1966年から1970年まで仏教系私立大学万行大学文学・人文科学学部の学部長を務める。1970年に南ベトナムを去ると同時に断筆。1975年から1983年までフランスのトゥールーズ大学で西洋哲学の助教授を務めた後、アメリカに移住。1987年に執筆活動を再開し、小説『地上における荒廃した一夜の果てへ』（1988年）、詩集『一切頂上には寂静』（2000年）の他、文学・哲学・仏教思想に関する多くの著作を発表。2011年、テキサス州ヒューストンにて没。

訳者

野平宗弘（のひら・むねひろ）

1971年生まれ。東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授。専門はベトナムの文学・思想。著書に、『新しい意識 ベトナムの亡命思想家ファム・コン・ティエン』（岩波書店、2009年）、『バックナリア 酒と文学の饗宴』（共著、成文社、2012年）、翻訳書に、井筒俊彦『禅仏教の哲学に向けて』（ぶねうま舎、2014年）、ヘンリー・ミラー『ヘンリー・ミラー・コレクション15 三島由紀夫の死』（共訳、水声社、2017年）などがある。

や、そもそもハイデッガーが思想した「存在」とは一体どんな出来事だったのか？ 「存在する」ことの根源的な意味は、すでに誰もが分かっている、解決済みの事項なのか？ いや、それより前に、ハイデッガーの Sein（ザイン）という語の訳語として、東アジアにおいて「存在」という語が本当にふさわしいものなのか？ 果たしてティエンが禅の見性に見出した<性>は、ハイデッガーの「存在」と同じ地平にあるのだろうか？ 禅や華嚴教学あるいはナーガールジュナの思想は、今日の全地球を覆っている近代知に対して、「存在」の別の可能性を提示しうるのか？ ティエンが讃えるヘンリー・ミラーやランボー、ニーチェなどの残した言葉あるいは沈黙に宿る思想的意義とは？ 言語と世界とはいかなる関係を取り結ぶべきなのか？……

いまだに残されたままの数々の問いを、『深淵の沈黙』は、今日の日本の読者にも投げかけ、著者自身がそうしたように、読者自らが一大疑問符そのものとなって、己の深淵へと飛び込むよう挑発し続けている。

選書

文学関連

ヘンリー・ミラー

『北回帰線（ヘンリー・ミラー・コレクション1）』（水声社）

ティエンが最も敬愛し、『深淵の沈黙』でも文学思想の頂点に位置付けられているミラーの代表作。芸術家、作家といった己の属性を棄て去って、ただ「存在する」のみと宣言する主人公。そして噴き出す生のマグマは、言葉の奔流となって読者を飲み込む。

『クリシーの静かな日々（ヘンリー・ミラー・コレクション4）』（水声社）

本書所収の短編「梯子の下の微笑」は、ティエンが愛するミラー作品の一つ。主人公の道化師アウグストは、死に臨む中で、「存在」の深奥に到り、そして大空へと羽ばたいていく。すでにすぐここにある「存在」の「神秘」をミラーは語っている。

『マルーシの巨像（ヘンリー・ミラー・コレクション5）』（水声社）

多感な10代後半、自殺さえ考えていたティエンは本作と出会ったことで「救済」されている。ミラーのギリシア紀行文にして徹底した現代文明批判の書。ティエンの話では、ハイデッガーも本作を読んでいたらしい。

『三島由紀夫の死（ヘンリー・ミラー・コレクション15）』（水声社）

本書所収の「あるベトナム詩人への手紙」は、1972年にティエンがミラーに送った手紙に対するミラーの返信。ティエンがミラーに投げかけた「ハイデッガーの Sein（存在）は、ミラーの cunt だ」という命題に、ミラーが応えている一節が含まれている。

アルチュール・ランボー

『地獄の季節』（岩波文庫）

1960年代半ば、ティエンはヘンリー・ミラーに出会った際に、ミラーから「ランボーの生まれ変わり」「ベトナムのランボー」と呼ばれている。『深淵の沈黙』では、ランボーの詩句が西洋の限界を告発するものとして捉えられ、ランボーの詩作と人生に抛り世界の詩的再創造の可能性が語られている。

『ランボオの手紙』（角川文庫）

ハイデッガーも自らの詩論で取り上げた「詩はもはや行動を韻律化することを止めて、みずから前進し始めるだろう」という一節、『深淵の沈黙』で引かれる「私は他人だ」という言葉など、詩人にして見者たるランボーの洞察が散りばめられた書簡集。

ニーチェ

『ツァラトウストラ（上）（下）（ニーチェ全集9、10）』（ちくま学芸文庫）

『深淵の沈黙』という題名は、ツァラトウストラの言葉（「意に反する至福について」）より取られている。没落（ウンターガング）と越え行き（ユ

ーバーガング）、深淵と高峰という対極の一致の思想は、ティエンの実存に激しく共振している。

『ニーチェ書簡集 II 詩集（ニーチェ全集別巻2）』（ちくま学芸文庫）

『ニーチェ全詩集（新装版）』（人文書院）
ティエンはニーチェを自らと重ね合わせつつ、ニーチェの晩年の「沈黙」を思想的必然的覚醒と見なす。そのニーチェの詩句を「沈黙」に到るまで燃え上がった炎のしるしとしてティエンは感受している。

フォークナー

『響きと怒り』（講談社学芸文庫）

「戦場は人間に絶望と愚かさを見せつけるものだ。勝利は哲学者と愚者の幻想にすぎない」——『深淵の沈黙』で引かれるこの一節は、ベトナム戦争当時を想起するなら、ティエンの絶望のほどを思わずにはいられない。

ニコス・カザンザキス

『キリストは再び十字架にかけられる』（教文館）
ベトナムでは、カザンザキス作品がティエンその他の作家によっていくつか翻訳紹介されている。長い年月をかけて金貨を貯めようやくエルサレム巡礼に旅立とうとした修道士に起こった出来事の逸話は、ティエンに宗教的な啓示を与えている。

西永良成

『激情と神秘——ルネ・シャールの詩と思想』（岩波書店）

ベトナム戦争の時代、南ベトナムの詩人たちにも影響を与えた詩人ルネ・シャール。難解で知られるその詩作と思想を、詩人の言葉そのものに寄り添い丹念に読み解いた研究書。

ヘルダーリン

『ヘルダーリン詩集』（岩波文庫）

リルケ

『ドゥイノの悲歌』（岩波文庫）

ハイデッガーの言う「世界の夜の時代」に、その「奈落の底」を耐え忍んだ二人の詩人。ティエンは詩論『リルケ』の中で、リルケの「別の息」＝詩の言葉に、世界の有り方の別の可能性を見出している。

アレン・ギンズバーグ

『ギンズバーグ詩集』（思潮社）

『深淵の沈黙』帯のミラーのアジテーションはギンズバーグの『吠える』にインスピレーションを与えた言葉でもあった。現代文明の逼塞下で懊悩苦悶する若者の叫びが轟く。

セリーヌ

『夜の果てへの旅（上）（下）』（中公文庫）

『なしくずしの死（上）（下）』（河出文庫）

セリーヌについては『深淵の沈黙』では言及されていないが、ティエンが愛する作家の一人である。

『思想の深淵』では、セリーヌの言葉「春など二度と戻ってこなければいい」がティエン自身の絶望の言葉として引かれている。

ゴンブローヴィッチ

『フェルディドウルケ』（平凡社ライブラリー）

丹生谷貴志

『〈真理〉への勇氣』（青土社）

西洋哲学関連

ハイデッガー

『存在と時間（上）（下）』（ちくま学芸文庫）
ベトナム戦争の窮極の原因は西洋哲学にあるとするティエンにとってハイデッガーは西洋哲学を「存在忘却」として告発した極めて重要な思想家であった。ハイデッガーが探求した根源的な「存在」に、ティエンは東洋の側から迫ろうとした。

『「ヒューマニズム」について』（ちくま学芸文庫）
サルトルとハイデッガーの「実存」の意味の違い、言葉と存在との関係性、詩人と詩の言葉の可能性、アリストテレス以降の文法が及ぼした言語に対する制約など、極めて重要な問題の考察がこの小冊子に詰まっている。訳者の渡邊二郎氏の詳細な註釈と訳語選定も大いに参考になる。

『ニーチェ I』『ニーチェ II』（平凡社ライブラリー）

ハイデッガーは本書でニーチェを西洋形而上学の完成者として取り扱っているが、ティエンは『深淵の沈黙』の附録「ニーチェの沈黙への回帰」の中で、そのハイデッガーのニーチェ解釈を批判している。

『真理の本質について（ハイデッガー選集11）』（理想社）

『哲学とは何か（ハイデッガー選集7）』（理想社）

『形而上学入門』（平凡社ライブラリー）

本書の中での「存在」（Sein）という語の語源学的考察に基づきつつ、ティエンはベトナム語での Sein の訳語「性」を提唱する。なお『深淵の沈黙』の訳註では書きそびれたが、ティエンが言う「待つこと」は、本書末尾で言及される「待つこと」と同じものだと考えられる。

『技術への問い』（平凡社ライブラリー）

現代科学技術の本質を「集・立」という語でハイデッガーは名指した。ティエンは、ベトナム戦争をいかに解決すべきかという問いに対して、戦争も平和もいずれも「集・立」と「表象」の次元に属するが故、根源的な解決にはならないと断じる。

大橋良介（編）

『ハイデggerを学ぶ人のために』(世界思想社)
本書所収の大橋良介氏の論考では、ハイデggerの Sein（ザイン、存在）の日本語訳として存在する「存在」と「有」の二つの訳語の訳出の根拠について考察している。

ジャック・デリダ

『エクリチュールと差異』（法政大学出版局）
デリダによるレヴィ＝ストロース批判、「彼が民族主義を告発するまさにその瞬間に、民族中心主義の諸前提をみずからの言語表現のなかに受け入れることになる」は、そのままベトナム戦争に反対する西欧知識人たちの言動にも当てはまるとティエンは1960年代当時に訴えていた。

エックハルト

『エックハルト説教集』（岩波文庫）
観想の極北に到って神さえ捨て去り「無」を見出したエックハルトの思想は、ニーチェ、ハイデgger、鈴木大拙、ヘンリー・ミラーそしてティエンの到らんとするところと思想の地平を同じくする。

マルクス・ガブリエル

『なぜ世界は存在しないのか』（講談社選書メチエ）
そもそも本書（原語直訳は「なぜそれは世界を与えないのか」）の邦訳題名にもある「存在」という西洋語の訳語が、世界の根源性を語るのに相応しいものなのか。ティエンは、西洋語の「存在」の根源的な意味と訳語について東洋の側、仏教の観点から考えていた。

エマニュエル・レヴィナス

『実存から実存者へ』（ちくま学芸文庫）

レーヴィット

『ヘーゲルからハイデガーへ』（作品社）
『ヘーゲルからニーチェへ——十九世紀思想における革命的断絶（上）（下）』（岩波文庫）

モーリス・ブランショ

『ブランショ政治論集 1958-1993』（月曜社）

ラクー=ラバルト

『政治という虚構——ハイデガー芸術そして政治』（藤原書店）

ハンナ・アレント

『人間の条件』（ちくま学芸文庫）

シモーヌ・ヴェイユ

『ギリシアの泉』（みすず書房）

ジョルジュ・バタイユ

『至高性——呪われた部分』（人文書院）

『内的体験——無神学大全』（平凡社ライブラリー）

『非 - 知——閉じざる思考』（平凡社ライブラリー）

『ヒロシマの人々の物語』（景文館書店）

ジル・ドゥルーズ

『意味の論理学（上）（下）』（河出文庫）

道簀泰三

『墮ちゆく者たちの反転』（岩波書店）

東洋思想関連

『老子』（講談社学術文庫）

存在の深淵として語られる「玄の又（ま）た玄」。開高健も『輝ける闇』で記した「玄」。その奥深く暗いところを、後にティエンはエンペドクレスの「パウボー」とも同定し、詩作では子供の頃に見た女優の両太ももの間の闇として描いている。

『荘子（全四冊）』（岩波文庫）

『深淵の沈黙』では『荘子』を否定的に捉えているが、ティエンは著作『ヘンリー・ミラー』では、『荘子』の言葉を用いてミラーを「無何有の郷に遊ぶ」者とも形容しており、『荘子』の世界を決して全否定してはいないことが分かる。

『易経』（岩波文庫）

『深淵の沈黙』で提唱される「弁証法」の別の訳語「易化法」の「易」の字は、万物の根源としての「易」の思想に由来する。ベトナム戦争の惨禍の中で、易のしるす「一陽来復」の到来をティエンは待っていた。

『無門関』（岩波文庫）

存在の真相を問うには、問う者自らが一大疑問符となり、己の実存を賭して問わなければならない。そのことを本書や鈴木大拙の著作を通じてティエンは学んでいる。

中村元・紀野一義

『般若心経／金剛般若経』（岩波文庫）
両経典とも、ベトナム仏教界では広く読まれている経典である。『深淵の沈黙』第二章末尾で引用される『心経』の否定辞が連なる一節、それは虚無主義を突き抜けてただの虚無へと到らんとするティエンの一切破壊の思想を象徴するものである。

中村元

『中村元選集 第2巻：シナ人の思惟方法』（春秋社）
本書の英訳に基づいて、ティエンはハイデggerの Sein（存在）の訳語について考察している。「有」という漢語が人間中心的であるという中村氏の指摘は、Sein を「有」と訳すことに対しても問題を提起するのではないだろうか。

中村元

『龍樹』（講談社学術文庫）

桂紹隆・五島清隆

『龍樹『根本中頌』を読む』（春秋社）
ティエンの生前、記者が「世界で最も偉大な思想家は誰か」と尋ねたときに、彼は「ナーガールジュナ（龍樹）だ」と答えていた。戯論すなわち言語構築物としての人間の思想とそれが生み出してきた幻想の一切を粉碎する書。

中川孝

『六祖壇経』（タチバナ教養文庫）

禅宗の六祖、慧能の言行録。日本ではダルマほどの知名度はないが、ベトナムでは有名で、ティエンもそして『深淵の沈黙』の献辞に挙げられているベトナム詩人の阮攸（グエン・ズー）も、「南方の野蛮人」と馬鹿にもされていた六祖慧能に自らを擬しているところがうかがえる。

王維

『王維詩集』（岩波文庫）

王維の字（あざな）は摩詰、つまり「維摩の一黙、雷の如し」で有名な凄まじい沈黙を体現した『維摩経』の主人公、維摩詰にちなむ。ティエンはのちに王維の漢詩「鹿柴」に、「存在」の原風景を見ている。

西田幾多郎

『善の研究』（岩波文庫）

『西田幾多郎哲学論集 I』（岩波文庫）

西洋哲学に学びながら、禅を中心とする東洋的思惟を基礎とする独自の哲学を確立した西田。ティエンは1969年のインタビューの中で「自分がやりたかったことは西田がすでにやってしまっていた」とも語っている。

鈴木大拙

『禅』（ちくま文庫）

ティエンは鈴木大拙の英文著作を読み、南ベトナムに Zen を紹介した人物でもある。本書に引かれる禅問答——「禅とは何か?」「熱火の上に煮えたぎる油!」は、ティエンの生の炎を激しく燃え上がらせた。彼は禅を自ら生きることで、ベトナムにその伝統を蘇らせている。

ティク・ナット・ハン

『禅への鍵』（春秋社）

欧米を中心に有名で、日本でも邦訳が多く出版されている禅僧ティク・ナット・ハン。本書には13世紀ベトナムの禅文献「課虚録」も収録、紹介されている。彼とティエンとは1960年代前半までは兄弟弟子の関係で知的に刺激しあっていたものの、ナット・ハンはティエンの激情を抑えることはできなかった。

井筒俊彦

『意識と本質』（岩波文庫）

東洋世界において形成されてきた叡智の数々を、本質指定、言語の意味分節の観点から構造化する試み。中でも、禅および中国思想に関する考察は、『深淵の沈黙』の読解にも大いに役立つ。

『禅仏教の哲学へ向けて』（ぶねうま舎）

禅に関する井筒氏の英文論集の日本語訳。氏の漢文の英訳は、それ自体が優れた思想解釈となっている。『意識と本質』の礎の一つとなった論集である。

若松英輔

『井筒俊彦——叡智の哲学』（慶應義塾大学出版会）
井筒俊彦氏が接してきた様々な書物・人物との交流・影響関係と思想形成を見やりつつ、氏の著述活動とその思想の全貌を描き出す。井筒氏の全体像を知るのに最良の評伝である。

若松英輔・安藤礼二（編）

『井筒俊彦：言語の根源と哲学の発生』（KAWADE道の手帖）

本書所収の拙論「地球社会化時代の東洋哲学——井筒俊彦とファム・コン・ティエン」では、井筒氏とティエンとの、東洋に対する眼差し、言語に対する認識の共通点を指摘しつつ、両者が観想した存在の根源性について考察している。

斎藤慶典

『「東洋」哲学の根本問題』（講談社選書メチエ）
井筒俊彦氏の思想について、現象学を専門とする著者が読み解いた本。思考が捉えることのできない絶対的な「無」にぎりぎりまで迫り、それを言語化しようとしている。

中沢新一

『チベットのモーツァルト』（講談社学術文庫）
『深淵の沈黙』序文冒頭に現れる空路の叫びの逸話は、唐代の薬山禅師を謳った李翱（りこう）の詩が元ネタとして存在している。その詩中の薬山の東洋的笑いの形而上学的意義について、本書ではポストモダンの用語と理論を用いて考察し、その意義を現代に見事に蘇らせている。

ベトナム戦争関連

野平宗弘

『新しい意識　ベトナムの亡命思想家ファム・コン・ティエン』（岩波書店）
ティエンの人生と思想と創作に関して、日本語で読むことのできる唯一の研究書。『深淵の沈黙』拙訳の訳註には書きそびれたが、釈迦の沈黙の意義や、ヤスパースによるナーガールジュナの弁証法の解釈などについても取り上げ解説している。

開高健

『輝ける闇』（新潮文庫）
ベトナム戦争の取材を元に書かれた、戦争文学の最高傑作の一つ。アンドレ・マルローに宛てた手紙を僧が読む場面があるが、その手紙の内容はティエンも参加した『ダイアローグ』というサイゴンで出版されていた本の一節と一致する。

『サイゴンの十字架』（光文社文庫）
開高健による南ベトナムでの戦争取材記録。このルポの中で、ティエンの名前は出てこないものの、ヘンリー・ミラーの友だちで、インテリの若い坊さんという表現で紹介されている。

ホアン・ミン・トゥオン

『神々の時代』（東京外国語大学出版会）
ベトナム北部を中心とする近現代の悲史を、小説というフィクション形式で描いた作品。ティエンが意識し批判もしていた北ベトナムの哲学者チャン・ドゥック・タオが巻き込まれた文学闘争事件の悲劇も本作中で描かれている。

宮内勝典

『焼身』（集英社）
ベトナム戦争期、南ベトナムのゴ・ディン・ジエム大統領のカトリック優遇政策に対して1963年に起こった仏僧ティック・クワン・ドゥックによる抗議の焼身自殺をテーマとした小説。ティエンの思想形成も、この不穏な社会情勢、仏教徒危機を背景になされてきた。

バオ・ニン

『暗夜/戦争の悲しみ（池澤夏樹=個人編集 世界文学全集 1-6）』（河出書房新社）
それまでベトナム国内で描かれていたようなベトナム戦争をベトナム人の英雄譚として描くのではなく、むしろその負の側面、悲劇的側面、若者たちの苦悩を描くことでベトナム現代文学の傑作として昇華した小説。

小倉貞雄

『物語　ヴェトナムの歴史』（中公新書）
20世紀半ばに到るまでのベトナムの歴史を概説。現在に到るまでのベトナムの文化形成を知るためには、中国による支配と影響、その後のフランスの植民地支配とそれらに対するベトナムの抵抗の歴史を学んでおくとよい。

松岡完

『ベトナム戦争――誤算と誤解の戦場』（中公新書）
第二次大戦後からベトナム戦争終結に到るまでの世界状況、アメリカ、ソ連、中国といった大国のベトナムに対する関与、および南北ベトナム同士の内戦の様相が、コンパクトに多角的に語られていて、ベトナム戦争の全体を概観するのに役立つ本である。

生井英考

『ジャングル・クルーズにうってつけの日』（岩波現代文庫）
アメリカにとってのベトナム戦争像を、映画や写

真、雑誌、小説などの文化表象の観点から論じている著作。

言語学関連

柳父章

『翻訳語成立事情』（岩波新書）
近代になって西洋語から翻訳された語であるにもかかわらず、今では、ごく自然に私たちが用いている翻訳語の数々を紹介。哲学の礎であり、西洋言語に密着している「存在」という語もその一つとして紹介されている。

西江雅之

『新「ことば」の課外授業』（白水社）
言語学の立場から、「存在論」が流行る言語とそうでない言語についての現象的特徴が指摘されている。ちなみに、生前に著者本人に聞いた話では、影響を受けた三人の人物の一人として、この選書リストにもある井筒俊彦の名を挙げていた。

S.I.ハヤカワ

『思考と行動における言語』（岩波書店）
『深淵の沈黙』で言及されるコージプスキーの「一般意味論」の理論に基づき書かれた本。本書に示された実務的な言語観と、禅の言語観とを対照させながら読むと面白い。

今井むつみ

『ことばと思考』（岩波新書）
思考は、言語によって影響を受けるのか。サピア＝ウォーフの仮説について、実証実験によって検証している。言語による世界の意味分節という考え方についての、科学的、心理学的観点からの客観的考察は大変興味深い。

互盛央

『言語起源論の系譜』（講談社）

イアン・ハッキング

『言語はなぜ哲学の問題になるのか』（勁草書房）

時代状況関連その他

平田実

『ゼロ次元――加藤好弘と 60年代』（河出書房新社）
1967年、ベトナム反戦運動興隆の中、日本では、佐藤栄作の訪米に抗議した由比忠之進氏が焼身自殺している。本書では、日本の前衛芸術集団ゼロ次元が執り行った街頭での由比氏の追悼式の様子が写真で紹介されている。

大江健三郎

『万延元年のフットボール』（講談社文芸文庫）
『深淵の沈黙』が出版されたのと同じ1967年、日本では大江氏の代表作の一つである本書が出版されている。顔と頭を朱色で塗り、全裸で肛門に胡瓜を突っ込んだまま首つり自殺したという主人公の友人のイメージが悪夢のように取り憑く。

西谷修

『夜の鼓動にふれる：戦争論講義』（ちくま学芸文庫）
近代戦争の特徴について、極めて明晰に分かりやすく解説してある著作。ティエンが思想的闘いを挑んだのは、本書でも書かれているように戦争として成就しベトナムを蹂躪した西洋近代の理性、哲学であった。

栗原康

『日本のテロ：爆弾の時代 60s-70s』（河出書房新社）
本書に指摘されているように、日本や世界の学生運動の引き金となったのはベトナム反戦運動の興隆だった。その当時のベトナムの若者が、戦争当時国内において、何に対して如何にして戦っていたのかを突き付けるのが『深淵の沈黙』である。

四方田犬彦

『1968 [1] 文化』（筑摩選書）

中平卓馬

『なぜ植物図鑑か』（ちくま学芸文庫）

バディウ他

『1968年の世界史』（藤原書店）

埴谷雄高

『埴谷雄高政治論集』（講談社文芸文庫）
『埴谷雄高思想論集』（講談社文芸文庫）

高橋和巳

『孤立無援の思想』（岩波書店）

間章

『時代の未明より来たるべきものへ』（月曜社）
世界の夜の中で、音楽と思想の極北へと向かった間章。講壇哲学とはまったく別次元で、彼もまたティエンと同じくハイデggerとの対決に挑んだ人物だった。

最果夕ヒ

『死んでしまう系のぼくらに』（リトル・モア）
戦争などなくたって、いつの時代であったって、心があまりに鋭すぎて傷ついて絶望を抱えて抑えきれない思いを声に出さずにはいられない若者たちが、世界のどっかの片隅にきつといるのだと思う。

坂口恭平

『けものになること』（河出書房新社）

アルフレッド・ベスター

『ゴーレム 100』（国書刊行会）

多文化社会・多文化共生を考える

（東京外国語大学出版会より）

真島一郎、川村伸秀（編）

『山口昌男　人類学的思考の沃野』

酒井 啓子（編）

『くアラブ大変動』を読む　民衆革命のゆくえ』

伊東剛史、後藤はる美（編）

『痛みと感情のイギリス史』

長谷部美佳、受田宏之、青山亨(編)

『多文化社会読本　多様な世界、多様な日本』

『Pieria』